

保育者養成のための『窓ぎわのトットちゃん』を用いた授業実践

和田 幸子

はじめに

本学こども教育学部は指定保育士養成施設として認可されており、「保育に関する専門的知識及び技術を習得させる」と共にそれらを支える豊かな人格識見を養うために「幅広く深い教養を授ける」ことが平成27年改訂指定保育士養成施設指定基準¹⁾によって求められている。ここでいう教養とは、個人が社会と関わり、経験を積み、体系的な知識や知恵を獲得する過程で身につけるものの見方、考え方、価値観の総体であり、知的な思考、規範意識、倫理、感性、美意識、主体的に行動する姿勢、バランス感覚、体力や精神力までも含めた総体的な概念ととらえてよい²⁾。

保育者養成教育においては、専門的知識・技術を取得させると同時に、保育者としての教養を身につけるべく教学活動を進めていく必要がある。本稿において、その試みの一部を報告する。

I. 問題・目的

1. 保育者に求められる教養

保育の現場で保育者は、複数の子どもたちと活動を共にしながら瞬時毎に変動していく保育状況の中で、一人ひとりに理解のまなざしを向ける。そして子どものさらなる成長に向けての具体的な願いを持つ。子ども自身が考えていることと照らし合わせ、すりあわせをしながら、その願いを具現化すべく手だてを考え試みる。あるいは、子どもへ願いを向けながらも常に子ども理解を見直していく。手だてを行いながら、子ども自身が願っていることを問い続けていくのである。さらに、試みた手だてによって、子ども自身の心の動きがどのように生じたのか読みとろうとする省察を経て、子ども理解を深化させていく。子ども理解、子どもへの願い、手だて、の三つの視点は、図1のように

循環して保育実践が続いていく。

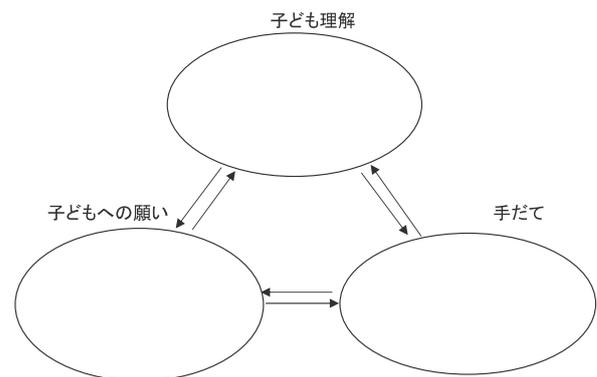


図1) 保育実践における三つの視点の循環³⁾

つまり、保育実践というのは、子ども理解、子どもへの願いを問い続け、手だてを考え続け、試みることである。保育者に備えられた知識、経験知、価値観、体力を総動員させて取り組む地道な作業となる。保育者に教養が必要であるのは、上記の三つの視点を明らかにして、良き保育実践を行っていくためである。

2. 『窓ぎわのトットちゃん』を用いた保育者養成教育

筆者は『窓ぎわのトットちゃん』⁴⁾を用いて、各学年の授業の中で上記の三つの視点の循環を考え続けることを試みている。本稿では、それら授業の展開を報告する。その目的は、本著を用いた授業が学生の保育に関わる問題意識や意欲を高め思考を相互にめぐらせる可能性があることを提示することである。

II. 方法

筆者が担当する1年次「保育者論」、2年次「障害児保育」、3年次「保育方法論」における本著を用いた授業展開を記し、学生がワークシートおよびリアクションペーパーに記した内容をもとに学生の学びを考察する。これらに加え、1年次後期「乳児保育」にお

いて実施した特別授業「リトミック」については授業内容を提示する。このことによって2015年度入学生の本著を用いた3年間に渡る学修の縦断的経過を報告する。学生には授業研究の一環として資料を使用することを伝えた承を得ている。

Ⅲ. 『窓ぎわのトットちゃん』の教材性

1. 『窓ぎわのトットちゃん』について

『窓ぎわのトットちゃん』はタレント黒柳徹子氏の自伝物語である。1981年講談社から発刊され800万部のベストセラーとなり、35カ国で翻訳された。型破りな個性のため小学一年生で早くも落ちこぼれとなってしまった著者「トットちゃん」が、転校先のトモエ学園で生き生きと小学校生活を送っていく。その様子や小林宗作校長の教育理念、ユニークな教育方法、級友との関わり、家庭生活、戦時下で考えたことなどが61のエピソードとして書かれている。また長目のあとがきには、黒柳のトモエ学園教育観、同級生のその後の活躍、小林宗作校長の略歴、黒柳を演出するプロデューサー佐野和彦が音楽学専修後に小林宗作の研究をしていたこと、本著にいわさきちひろの絵を使うことになった経緯が書かれている。

2. 『窓ぎわのトットちゃん』の教材性

筆者は保育者養成教育の授業の中で、本著の物語、掲載画、そして黒柳がたどったテレビというメディアを通じた文化の3点を取り上げたいと考えた。その理由を下記に記す。

①物語『窓ぎわのトットちゃん』から保育者が学ぶこと

小林宗作は、1893(明治26)年群馬県生まれ、小学校代用教員を経て東京音楽学校で学び、私立成蹊小学校の音楽教師をしていた。この学校の創立者、中村春二の教育方針が後年の小林の教育方法に具現化される。幼児期の音楽教育にこそ真の教育の実現があると確信した小林は30歳でパリに留学し、E・J=ダルクローズからリトミックを直接学んだ。帰国後トモエ幼稚園とトモエ学園(小学校)を設立し、大正自由教育運動の流れを受けて自主学習、散歩学習、先駆的な音楽教育を特徴とする教育実践を行った(黒柳1981)。工夫された授業、行事の在り方の具体例とそこに参加する子どもたちの様子が本著には書かれている。

小林校長は初めて会ったトットちゃんの話をも4時間聞き続けたことに始まり、機会ある毎に「君は、ほんとうはいい子なんだよ」という声をかけたという。トットちゃんのことについてを止めず「もどしとけよ」とだけ言ったことなど、子どもを信頼しようとしていたことがわかる(黒柳1981)。

小林の教育への熱意とアイデアと子どもへの優しさはどこからくるのか。このような問題意識を、保育者を目指す学生に持ってほしいと筆者は考える。その内容として第一に、大正自由教育運動という教育、文化、芸術の自由で新しい機運がみなぎった時代であったこと、第二に、世界の新しい教育の潮流に敏感であったこと、第三に子どもの存在そのものを尊重するような具体的な教育方法を発想し試行したこと、それによって向上心を持ち続けたからと筆者は考える。

また本著のエピソードからは、子どもがどんなことに興味を向け、自分もしてみたいと意欲を発揮していくのか、また子どもの目から世の中はどのように見えているのか、ということを読みとることができる。トットちゃんたちの学校生活や家族との日常生活を奪っていった戦争についての描写からは、平和であることの大切さを確認してほしいと願う。

②掲載画から保育者が学ぶこと

「いつか本を書くときには、ちひろさんに絵を描いていただきたい(黒柳他2014a)」と思っていた黒柳は生前のいわさきちひろに出会っていない。いわさきは1974年55歳で逝去しており、黒柳は本著の元となる記事を雑誌に連載で発表するに当たり、その内容にあう絵を、遺族である長男松本猛氏と由理子夫人と共に原画から選んだという。本著にはカバー表絵を併せて子どもを描いた21点の絵が載せられている。

では、なぜ黒柳はいわさきの絵に惹かれたのだろうか。「子どもたちを、こんなに子どもらしく、かわいらしく描いた画家がかつていたらどうか」と述べ、また、いわさきの訃報に触れた際には「子どもの味方がいなくなった(黒柳他2014a)」「弱者の味方が亡くなってしまった(黒柳他2014b)」と嘆いている。

いわさきちひろは1918年、福井県で生まれ、東京で育つ。14歳で絵の勉強を始め、その後、書も始める。戦後の1949年、紙芝居『お母さんの話』出版を機に、画家として立つ決意を固め(松本1999)、新聞広告、ポスター、カレンダー、雑誌や童話の挿画に取り組ん

だ。特に、アンデルセン童話は日本で有名なほとんどの物語を手がけており、ライフワークとしていた。

このような挿絵的な仕事から、自分自身で自由に描いた絵に自らの言葉を添える絵本制作の可能性を探るようにもなる(東 2012)。これは至光社の武市八十雄の支援のもと、さまざまな実験を経て、言葉を最小限にとどめて絵で展開する絵本となり(松本 1999)、1968年49歳で『あめのひのおるすばん』の出版に至る。以後、意欲的に絵本を制作するようになった。その絵は、透明水彩絵の具を用い、にじみ、たらし込み、白抜き、色抜き、濁筆法など東洋の伝統的描法を取り入れた独自の表現となった(宍倉 2014)。いわさきは、絵本を芸術表現のジャンルと考え、印刷美術の果たす社会的役割の重要性を語り続けた。それは画家に絵本原画の著作権があると初めて主張したことにも現れている。また、いわさきの死後、子どものための「絵」は「芸術」ではないと考えられていた当時の世論へ挑戦するかのように、遺族らによって「いわさきちひろ絵本美術館」が東京に設立されたことにもつながる(松本 1999)。絵本を文化財と位置づけたこれらの経過から、戦後日本の絵本文化史の重要な一端を理解することができる。

自身の少女時代に感じた驚き、好奇心、寂しさや揺れる心を、いのちそのものとも言える子どもを描くことによって作品の中に映し出した(宍倉 2014)。戦争体験を経て、いわさきは平和と子どもの幸せを生涯通して追求し、九千枚もの子どもの絵を利き腕の左手で描いた(松本 2000)。そのいわさきの絵を本著に用いた黒柳もまた、子どもたちの自由と平和を希求して活動する者である。いわさきの絵を採用した黒柳の意図はここにあると筆者は考える。

③テレビ時代の到来から保育者が学ぶこと

本著の作者黒柳徹子がテレビタレントとして活躍中であることは学生も知るところである。日本でテレビ放送が始まったのは1953(昭和28)年であり、黒柳はNHKが養成したテレビ女優の1期生なのである(黒柳 2016)。黒柳の活躍は64年にも及ぶ。

本著の読者はトットちゃんが小林校長の理解のもと自尊心を取り戻して成長していくことを知る。そのトットちゃんが成人して黒柳徹子としてテレビというメディアで広く長く人々の文化的感性の涵養に貢献しているのである。読者は、この業績を作り出した素地

の多くはトモエ学園で生まれただろうと考える。自分の思いを言葉にして他者に伝えるようになること、他者の気持ちに耳を傾けて聞こうとすること、この2点をトモエ学園では育てようとしていたことが読みとれる。

また、当時、まだ日本にはなかったテレビというもの存在をトットちゃんに最初に教えたのが同級生の泰明ちゃんだったことも興味深い(黒柳 1981)。トットちゃんは小児麻痺の障害のある彼と共に木登りをした。その木の上で初めて聞いたテレビというものに興味を向けていたのだった。

それ以前の子どもたちは街頭紙芝居や絵雑誌、保育絵本、童謡絵本を読んでもらうことによって娯楽を得ていた。黒柳ももともとは、子どもに上手に絵本や童謡を読んであげられるようになりたいと考えていた(黒柳 2016)。このような人を介した文化の伝播から、テレビの登場によって全国への一斉発信へと変わった。今日、子どもたちを取り巻く文化状況を考える際に、テレビ、さらにはインターネット等メディアの影響が大きいことは否定できない。しかし重要なことは、これらメディアの効用を認めつつ、人を介した文化の伝播者としての保育者のあり方を問い続けることであろう。その方法を模索することは専門職としての保育者が負う責務だと考える。

以上の教材の価値を意識した授業実践を行った。2015年入学生の1年次、2年次、3年次での授業実践を次項で報告する。

Ⅳ. 『窓ぎわのトットちゃん』を用いた授業実践

1-1. 1年次「保育者論」における『窓ぎわのトットちゃん』を用いた授業

①背景

幼稚園教諭・保育士の専門性について理解し、自ら目指す保育者像を言語化することをねらいの一つとする科目である。2015年度前期受講生は49人であった。『窓ぎわのトットちゃん』を読み、一番印象に残った場面を書き出し、それについての考えをレポートに記す、という課題を2015年4月30日(月)に与え、6月11日(月)までに提出させた。

②授業の経過

学生がレポートで取り上げた同じエピソード毎に、または同じような問題意識を持って討議ができるであろうエピソード毎に4～5人のグループに分け、次回から2コマを使いグループ討議とポスター作りに取り組んだ。エピソードの中に「子ども理解」「子どもへの願い」「手だて」がどのように循環しているか、ということにポイントを当てて討議するように勧めた。その後、3コマをかけてグループ発表を行った。図1で示した保育実践における三つの視点の循環をもとにしたワークシートにメモをとりながら発表を聞き、発表の最終回には各自が目指す保育者像を文章にして書くようにした⁵⁾。

③結果と考察

複数の学生が「校長先生」「授業」「本当は、いい子なんだよ」「大冒険」「新しい学校」「もどしとけよ」を印象に残ったエピソードとして選んだ。他のエピソードは1～2名によってあげられている。全部で19のエピソードが最も印象に残った箇所として選ばれた。

まず読後のレポートから学生の学びを考察する。「レポートが重荷だと思っていたが、読み進めると面白く、一気に読んだ」「はじめからおわりまで本を読んだのは初めて」と記した学生がおり、読書による達成感を得たことがわかる。その面白さは、「子どもの頃を思い出した」ことや、「子どもたちが心の中でこんなことを考えているのだと新たに知った」ことに始まり、「子どもが主体的に始めたことには意味がある」ということを知り、「小林宗作校長のように子どもの気持ちを理解し、コンプレックスを感じないような手だてをしていきたい」というように自らを保育者の立場において考えるようになったことに及ぶ。「将来子どもと関わっていく職業に就くと思うので、悩んだりわからなくなったらもう一度この本を読みたい」というように保育者の生涯に必要な本となりうると考えていることがわかった。

グループ討議においては、「友達がどのように登場人物の感情や表情を捉えたかがわかり」「共感を得られることがとても嬉しく」「人の意見を聞いて新しい発見をした」とリアクションペーパーに記されているように、各自が本著から感受したことを相互に聞き合い討議することを、楽しい、と捉え、その学びが深い

ものであることを経験した。ポスター作成では「どんどん色がついていくのはとても嬉しく」、討議の成果をポスターとして形に表すことに喜びを見いだしている。

いずれのグループも活力のある発表ができ、聞きあえた。特に小林校長が子どもの話をよく聞いたことについて「聴く」とポスターに表したグループがあり、なぜこの字を使ったのか、という質問があった。発表グループは、「小林校長は心で子どもの思いをききあげたから、心という部首の入ったこの字をつかった」と答えていた。筆者は「傾聴ということばのように、対象に心を傾けてしっかりときくことなので、この字をつかったことは意味がある」と答えた。そのように、発表と討議が重ねられた。

3コマにわたるグループ発表のうち1コマ目は2015年度公開授業として先生方に参加して頂き、「学生の感想が素晴らしかった」「保育の根幹となる考え方を学生が自分たちの学びとして発表している様子が良かった」「今回の授業に至るまで、書籍の選定や考える枠組みの提示、学生グループに対する指導などがあって、それらが活かされてあのような発表に結びついているのだと思う」と感想を頂いた。

学生は三つの視点の循環をもとにしたワークシートに、各エピソードに込められた「子ども理解」「子どもへの願い」「手だて」を書き入れた。それをもとに「話を聞き、子どもを否定せず、子どもが始めたことは最後までさせる」「子どもの主体性を守る」「大人の考えを押しつけず、子どもの声に耳を傾ける」「補助、見守り、応援する人になりたい」「素直になれる環境作りに努める」のように、目指す保育者像を記した。

このように、各自で読書して抱いた感想をもとに、グループで自分の考えを伝え、また他者の考えを聞き、ポスターとしてまとめあげ、クラスへの発表と討論へと進めた。興味を持ち続けて相互に学び合うことができた。これらの過程を経て、各自の保育観を確認することができたと考える。

④残された課題

61のエピソードのうち、選ばれなかった42については、本授業では取り上げていない。その中でも、是非熟読してほしいエピソードがある。再び読む機会を作っていくことが課題として残った。

1-2. 1 年次「乳児保育」における『窓ぎわのトットちゃん』を用いた授業

①背景

「乳児保育」は、乳児（0.1.2 歳児）と、乳児保育についての基本的な理念、知識、技術を学ぶ演習科目である。「乳児保育の実践と合評会」の授業内容で、リトミックの実際を体験することにした。

日本音楽教育史では、小林宗作は日本へリトミックを紹介した者として位置づけられる。小林はリトミックによって身体の神経組織に働きかけ感受性を育成することをねらいとしていた（板野 2016）。その実際の様子は、本著に記されている（黒柳 1981）。しかし後年、普及の過程で、新中間層の家庭の教育要求と結びつき、小林の意図を逸れた実践も見られるようになった。また、障害児保育の歩みを振り返ると、障害の軽減のために訓練として用いられた実践もあった（和田 2007）。そこで、学生にはリトミックをすることによってどのように感性が動くのかを体験してほしいと考え本授業を設定した。このことによって、学生が将来保育の現場に身を置いたときに、リトミックの実践を創出していく保育者になってほしいと考えたからである。「乳児保育」で行った理由は、演習科目であり 24~25 人の設定で行えること、1 年次後期科目であり前期の学びを受けて行えること、言葉での説明を理解して行うのではなく音楽による即時表現をするという乳児のありようを体験できると考えたからである。

前回には本著のリトミックのエピソードを取り上げ、トモエ学園での実践を確認して臨んだ。

②授業の実際

特別講師、田中知子氏を招聘して行った。田中氏はピアノを専修したのち、リトミック指導者養成コースで学び、現在、認定こども園で実践を行いながら保育者養成教育に携わっておられる。授業の実際を表 1,2 に 2 例を記す。

対象：2015 年度後期 a クラス 24 人、b クラス 25 人、計 49 人受講
 授業日時・場所
 : 2015年12月7日(月) 4 講時(aクラス) 6 号館音楽室
 2015年12月18日(金) 2 講時(bクラス) 慈光館 1F 保育実習室

表 1) リトミックの活動 1

ねらい	活動
1. ウォーミングアップ ・音の有無、音の大小、テンポの変化 音の高低の変化への気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノ曲のリズムに合わせてクラップする。 ・ピアノ曲が止まったら動きを止め、再びピアノ曲が始まったらクラップする。 ・ピアノ曲の音の大小の変化に伴い、大きくクラップしたり、指打ちする。 ・ピアノ曲のテンポの変化に伴い、クラップのテンポを変化させる。 ・ピアノ曲の音の高低に伴い、頭または膝を軽くたたく。 ・2人で向い合ってピアノ曲のリズムに合わせてクラップする。曲が止まったら教師が言う体の箇所を2人でくっつけあう。
2. 2 拍子、3 拍子、4 拍子の聴き分け	<ul style="list-style-type: none"> ・2人で向かい合って座り、ピアノ曲の拍子の変化に合わせて手合せをする。

これらは本著の中に同様の実践があり、リトミックの機軸とも言える体験ができたと考えられる。

表 2) リトミックの活動 2

ねらい	活動
・リズムの違いに気づき、簡単なゲームをすることを楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・白、黄、緑、赤のプレートのいずれかを持ち、それぞれ「おにぎり」「たまごやき」「プロッコリ」「ソーセージ」と言いながら、そのリズムをプレートに指で鳴らす。 ・ピアノ曲に合わせてステップする。ピアノ伴奏に上記のうちいずれかのリズムが聞こえてきたら、その色のプレートを持つ者は急いで前に出てリズム打ちをする。再びステップする。

上記 4 種のリズムは楽譜 1 の通りである。

楽譜 1) 4 種のリズム



言葉を 4 拍子で繰り返し言い、そのリズムでプレートを鳴らし、次にピアノ曲の中に出てくるこれらのリズムを聴き取ることによって進めるゲームである。

これらリトミックの活動を、学生は始終楽しそうに取り組んだ。聴くこと、声を発すること、体を動かすことを同時に行うため、楽しみながらリズムや音高、その変化に注意を集中させていたと思われる。

2. 2年次「障害児保育」における『窓ぎわのトットちゃん』を用いた授業

①背景

「障害児保育」では、障害のある子について理解し、障害のある子が保育の場に通うことの意義を知り、保育者として為すべき手だてについて学ぶことをテーマとしている。この授業では、障害の種別毎にその特質と支援の実際をグループディスカッションと発表を取り入れながら学んできた。下記は14回目授業および15回目の授業内で行った本著を用いた実践部分である。トットちゃんと同級生には障害のある子が複数いたようであり、彼らと共に授業や行事で活動した様子が描かれている。そこから先生が工夫、配慮していたことを読みとることができる。本時では本著を持参させ、該当部分を読みあうことにした。

さらに、本著より印象に残った一文を引用し「トットちゃん折々のことば」を作ることにした。朝日新聞の朝刊で、哲学者の鷲田清一氏が他者の文章や話から毎日一言ずつ取り上げ、読み解いてコラム欄にまとめているものを参考に、学生が心動かされた一文をじっくり読み込んでほしいと願い実践した。引用の一言を写す・この一言を言った人の名・この一言の自分なりの解釈、推測、説明、感想、を文章化して書くことを説明した。

②授業計画

授業計画を記す。

対象：2016年度前期 a クラス 27人、b クラス 25人 計 52人受講 ⁶⁾
授業日時：2016年7月14日(木) および7月21日(木) いずれも 1 講時(bクラス)、2 講時(aクラス)
場所：慈光館 1F 保育実習室

表 3) 2016年7月14日(木)第14回目「障害児保育」本時指導案

	学習内容・活動	手だて
0:00	1.インクルーシブ教育・保育に至る歴史を復習する。	・テキスト ⁷⁾ を見ながら戦後の障害児教育・保育の歩みをたどる。
0:10	2.『窓ぎわのトットちゃん』に描かれたインクルーシブ教育の実際を読みとる。	・泰明ちゃん、高橋君が登場する箇所*を示し、エピソードを紹介する。 ・各自で該当箇所を読む。
0:30	3.『窓ぎわのトットちゃん』から各自の「折々のことば」をつくる。	・昨年度グループディスカッションをしたことを思い出し、目次を見て心に留まった部分の本文を読む。 ・印象に残った一文を引用し、解釈、推測、説明、感想、を文章化して「折々のことば」を書くようにする。 ・黒サインペンを1本ずつ配り、落ち着いて書けるようにする。 ・黒板の帯状展示シートに各自の「折々のことば」を貼る。 ・のり、黒サインペンを箱に戻す。
0:55		

*「授業」「プール」「大冒険」「高橋君」運動会」「しっぽ」の箇所

表 4) 2016年7月21日(木)第15回目「障害児保育」本時指導案

	学習内容・活動	手だて
0:00	1.『窓ぎわのトットちゃん』の「折々のことば」展示会をする。	・授業開始時までに壁面に「折々のことば」帯状展示シートを貼っておく。 ・タックシールを3つ持ち、自由に歩いて展示をじっくり見る。印象に残った箇所に貼る。
0:10	2.リアクションペーパーを記入する。	

③結果と考察

第14回目授業では「授業」「プール」「大冒険」「高橋君」「運動会」「しっぽ」のエピソードを紹介した。その後、各自が自分の本を開けてこれらの部分、さらには気になった部分を読む時間を設けた。学生らは1年次に読んだ本著を再び目にしてしばらくの間読み込んでいた。この日のリアクションペーパーには、トモエ学園での障害のある子との関わりの中から学んだことが書かれている。代表的なものを下記にあげる。

- ・障害があってもなくても同じ子どもだと捉え、一人一人に合わせた支援を行うことが大切だと改めて思いました。
 - ・1年前に読んだトットちゃんをもう一度読んでみたらさらに理解が深まった。勉強した障害のことがこれかと思えるようになった。
 - ・トモエ学園の、一緒にする、というのがいいなと思いました。助けるという風に思いがちだけど、一緒にするという意識を持ちたいです。
- また、下記のように記している学生がいた。
- ・トットちゃんは学習障害、注意欠陥多動性障害だったのかと初めてこの本を読んだときにはあまり考えなかったなあと。今テレビなどで活躍しているのがすごいと思う。

新装版あとがきには、黒柳自身が「LD⁸⁾の本にはたいがい私の名前が出てきます。私の退学になったあたりがどうしてもLDっぽいという事になるのでしょう。(中略)いずれにしても、このトモエ学園の教育は、偶然にも、LDの子どもの教育にぴったりだったのだ、とLDの本を何冊か読んで思いました。その点でも、小林先生に感謝しています(黒柳2015)」と記している。

重要なことは、トットちゃんが生きにくさや理解さ

れにくさの渦中にいるときに、小林校長はその事実を的確に冷静に見ながらもトットちゃんを信頼し励まし続けたということである。そしてそれに応えるようにトットちゃんは育ち、自尊心を持ち、後にテレビを通して多くの人を力づける働きをするようになったのである。

「トットちゃん折々のことば」にもそのことが記されている。資料1には、子どもの素質を信じて肯定的なメッセージを送り続けた小林校長の姿と、小林校長の期待に応えようと育っていくトットちゃんの姿を見ることができる。それは、資料2のようにトットちゃんの言葉からも明らかに知ることができる。

3. 3年次「保育方法論」における『窓ぎわのトットちゃん』を用いた授業

①背景

「保育方法論」は教育・保育の方法及び技術をテーマとする科目である。この授業の中では i) 5歳児クラス対象の絵本選択と教材研究、ii) 教育・保育における工夫された具体的方法、の2点に着目し本著を用いた授業を行った。i) については、本著の掲載画の作者であるいわさきちひろの生涯から日本の児童文化史を提示し、彼女が創作した絵本を保育現場で用いる場合の教材研究の仕方を提示したいと考えた。ii) については、これまでの本著を用いた授業で取り上げられなかったエピソードには、トモエ学園でのユニークな、工夫された教育方法について書かれたものがあり、是非この機会に取り上げたいと考えた。授業の設定は以下の通りである。

対象：2017年度前期受講生 49人

場所：1号館 401教室

②授業の実際

i) 5歳児クラス対象の絵本選択と教材研究

2017年7月6日（木）2講時の授業の概要を記す。いわさきちひろの生涯から、絵、紙芝居、絵本、それぞれに力を注いだ時期があり、低通するテーマは子どもの存在の尊厳と平和の希求であることについて紹介し、特に独自の絵本創作に至る過程についてはDVD視聴も交えて理解できるようにした⁹⁾。「ちひろさんの絵は可愛く優しいけれど、どこか不安定だと感じていた」と記した学生もあり、いわさきの過酷なほどの

資料1) トットちゃん折々のことば①

思	な	れ	て	た	る	→	
い	ん	る	い	校	よ	校	君
が	だ	と	る	長	う	長	は
芽	「	ト	と	先	に	先	、
生	と	ッ	思	生	感	生	本
え	思	ト	い	は	じ	は	当
る	い	ち	ま	ト	る	、	は
と	い	や	し	ッ	言	ト	、
思	い	ん	た	ト	葉	ッ	い
い	子	自	。	ち	だ	ト	い
ま	に	身	「	や	と	ち	子
し	な	も	い	ん	思	や	な
た	ろ	「	い	の	い	ん	校
。	う	私	子	こ	ま	を	長
と	は	「	と	を	し	信	先
い	い	と	を	認	。て	生	！
っ	い	言	わ	め	ま	い	「
た	子	わ	め	ま	い		

資料2) トットちゃん折々のことば②

っ	長	い	ッ	エ	の	の	「
た	先	ま	ト	学	強	こ	先
だ	生	す	ち	園	い	の	生
ろ	は	。	や	の	意	言	に
う	嬉	ま	ん	先	志	業	な
と	し	た	に	生	を	に	っ
思	い	、	伝	の	感	は	て
い	し	こ	わ	や	じ	す	あ
ま	し	の	っ	さ	ま	ご	け
し	な	言	て	し	し	く	る
た	っ	葉	い	さ	た	ト	。
。	て	を	言	た	や	ッ	ト
	ほ	し	わ	の	だ	き	ト
	し	わ	れ	だ	い	っ	ト
	い	れ	た	と	が	と	ト
	と	た	思	ト	ト	ち	ち
	思	校		モ	ん	ん	校

悩みから描き出された作品であることに驚いていた。

その後、いわさきちひろ『ことりのくるひ』¹⁰⁾について、筆者の解釈を紹介し、この絵本を用いて筆者による5歳児クラス向けの模擬保育を行った。

学生は課題として、各自が5歳児クラス用に選んだ読み聞かせのための絵本について教材研究に取り組んだ。絵本題名、作者、出版社、初版年を記し、①大ま

かなあらずじ②作者について③この絵本の特徴・魅力④この絵本を保育に取り上げようとする5歳児クラスの実態⑤この絵本を5歳児クラスで取り上げるねらい、の5つの項目で教材研究をするようにした。この内④については、選んだ絵本のそのねらい設定に適切であろうクラスの実態を想定して書くことにした。初版年を記させたのは、文化的背景を把握してほしいことと、選んだ絵本がこれまでどれくらいの年月読み継がれてきているのかを知ってほしいと考えたからである。

今回、各自が取り組んだ教材研究の成果を、読み聞かせの実演で発表することはできていない。保育者を通じた文化財の伝播であることを自覚しつつ今後保育技術を高める機会を持っていきたい。

ii) 教育・保育における工夫された具体的方法

「授業」「海のものとの山のもの」「よく噛めよ」「それからさあー」「散歩」「島の先生」「リトミック」「小林一茶」「泉岳寺」「図書室」「はくぼく」にはトモエ学園での日常的な子どもたちの活動が描かれている。ここには教育、保育における工夫された方法が込められていると考える。

2017年7月13日(木)2講時の授業は4～5名のグループ活動を行った。グループ毎に上記より1つのエピソードを担当し、①担当箇所のアらすじ②この教育方法についての説明③この教育方法の良いところ④乳幼児の保育に活かせる部分について、グループディスカッションを行い発表した。

「海のものとの山のもの」「よく噛めよ」「それからさあー」は食事場面に関するエピソードであり、食材がどこからできているのか興味を持たせたいという願い、またどの子にも話してほしいという願いのもと、ゆっくりとした楽しい食事の時間になっていたことがわかる。描いたイメージ図からも感じられる(資料3)。毎日繰り返される場面であるからこそ、子どもたちは食材について考え、考えたことを皆に伝える喜びを得て育ち合っていたのであろう。また、「散歩」は毎日午後に行うトモエ学園での特徴的な取り組みであるが、自然物への観察の機会を持ち、地域社会への興味を引き出すような関わりがあったというエピソードである。今日の保育においても、散歩は日常的に行われている。本エピソードの担当グループは、子どもが発見した事柄に的確に答え、さらに興味を広げるために

は、保育者が豊かな知識を身につけておく必要があると報告した。子どもがふれるであろう事柄について、保育者は興味を持って学び続け、見識を広げようと向上心を持ち続ける必要があるのである。一方、島の作り方を教えに来てくれたお百姓さんが、虫、鳥、天気のことなども面白く話してくれ、それ以後散歩の際に出会うと「島の先生」と尊敬を込めて呼んだエピソードも読み合うことができた。その道に詳しい人から習うとき、子どもは敬意をもって聞き、更なる興味を向けると報告した。

資料3)「それからさあー」のイメージ図



V. 全体的考察

2015年度入学生の、本著を用いた授業実践は、1年次は目指す保育者像を描くこと、リトミックの体験、2年次は障害のある子と共に過ごすトモエ学園の実践、3年次は掲載画の作者であるいわさきちひろの生涯とその絵本を題材とした教材研究、トモエ学園の工夫された教育方法、とテーマを定め順に進めてきた。それぞれから学生は協同的に学び、子ども理解と子どもへの願いに基づいた手だてのあり方について、主体的に思考を重ねることができた。その効果をもたらせた理由をあげる。

1. 本著内容の魅力

まず、本著が保育を学ぶ学生にとって魅力的であるということである。普段読書になじまない学生にとっても、本著は読むことができ、おもしろかった、という感想を持った。物語に引き込まれ、心が動く経験をしたのである。本著に登場する子どもの立場、先生の

立場、親の立場、それぞれの心情を慮り、自分の身に置き換えて考え、その出来事の意味を深く考えていた。読書によって、自己に向き合う経験をしたと考えられる。

そのことに基づいて、グループ活動が活発にできた。自分が感動したことや考えたことを言葉にして伝え、お互いに聞き合うという対話となった。自分が認められ、また他者を認める体験となった。その過程で知的な思考を深めることができた。

2. 本著を用いた授業展開

3年間に渡る授業経過では、各自の読後レポートに始まり、グループ討議、発表、折々のことば作成、教材研究、と進める中で多様な学修形態を経験した。一人で省察すること、協同で意見を交わすことを経て再び一人で考える機会を設けることによって興味を持続させ、繰り返し本著からの学びを継続させることができたと考える。発表のための資料作成に取り組む中で、深く保育のあり方を考えるという経験をした。

おわりに

本著を用いることによって学生は、子ども理解、子どもへの願い、手だて、の三つの視点の循環をイメージした思考を重ねることができた。対話、協同的な学修であった。

注

- 1) 厚生労働省（2015改訂）指定保育士養成施設指定基準第1性格
- 2) 文部科学省中央教育審議会（2002）新しい時代における教養教育の在り方について
- 3) 堀智晴（2004）保育実践研究の方法. 川島書店.31を参考に作成した。
- 4) 黒柳徹子（1981）窓ぎわのトットちゃん. 講談社
- 5) 拙稿（2016）授業『保育者論』において目指す保育者像を探る試み～『窓ぎわのトットちゃん』を題材としたグループ発表をとおして～. 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要第54号.247-256で詳細を報告している。
- 6) 学校教育コース3名が受講したため、1年次の履修より人数が多くなっている。

- 7) 柴崎正行編（2014）障がい児保育の基礎. わかば社.170-182
- 8) 『『学習障害』というように訳されています』と黒柳は記している。黒柳徹子（2015）窓ぎわのトットちゃん新組版.370
- 9) 海南友子監督・編集（2012）DVD いわさきちひろ～27歳の旅立ち～
- 10) いわさきちひろ（1971）こどりのくるひ. 至光社

引用文献

- 東直子（2012）ちひろの情熱あふれる愛と波乱の人生. Moe34（9）.30
- 板野晴子（2016）日本におけるリトミックの黎明期. なみ書房 102-103
- 黒柳徹子（1981）窓ぎわのトットちゃん. 講談社 278-280, 198-200, 62-67, 92, 107-109
- 黒柳徹子（2015）窓ぎわのトットちゃん新組版 370
- 黒柳徹子・山田洋次・内藤廣（2014a）“トットちゃん”が世界中で愛される理由. 婦人公論 99（16）.63
- 黒柳徹子・山田洋次・内藤廣（2014b）トットちゃんといわさきちひろの世界. 新刊展望 58（8）.11
- 黒柳徹子（2016）新版トットチャンネル. 新潮社 4.28
- 松本猛（1999）母ちひろのぬくもり. 講談社 146, 36, 214-216
- 松本善明（2000）妻ちひろの素顔. 講談社 195
- 宍倉恵美子（2014）「子ども」を見つめて. まるごとちひろ美術館. 東京美術. 14, 25
- 和田幸子（2007）保育者養成校における演習「幼児音楽表現」と学生の学習プロセス—ワークショップと『窓ぎわのトットちゃん』のレポートより—. 生活科学研究誌 Vol.6.145

付記

リトミックの特別講師としてご出講頂いた田中知子氏には、本稿の該当部分掲載について了承頂き、さらに記載について貴重なコメントを頂いた。

